

明治と大正初期迄の百姓の人々は朝星を拜んで田畑に出て夕べには月影を踏んで帰るが、子供は労働力の一部で早朝から起こされ水汲みに（大正末期迄は井戸はあまり無かった）数十米も遠くに桶を担いで汲みに行き、ご飯炊きと家事労働が子供達を酷使させた。

農繁期には親達が仕事に夢中になり、家事の仕事は子供達が埋める事になる。親達は子供を休校させて迄も働かせるのが当たり前であった。雨降りの日には親達は屋外仕事が出来ないから子供に今日は登校せよと言うが、子供は数十日も休校し、勉強が遅れ先生に叱られるから風呂敷に本を入れ弁当を持参、親には登校の様に見せかけるが仲間と野原や川で遊ぶのが普通であった。

小作人と貧農の環境に生まれた子供は両親の目の回る程の忙しさを見ておるから両親の言いなりになり、其れが当たり前と思っておるが休校させて迄も子供の苦勞を補なわなければならない両親の教育に対しての低さが根底から疑う。

藩制時代の百姓には教育を禁じ職業の選択も禁じたと言うが、百姓が学問を覚えると批判的になり百姓が百姓で無くなるのを恐れたのである。又、他国に出るにも勝手には出来なかったと言う。止むを得ない時は寺の許可証が必要で有り、寺の証文が無いと船や関所の通行が許されなかったと言う。

百姓は他国との往来も出来ず見聞を広げる事も無く何に一つ自由が無かった。

百姓の出世の道の只だ一つ、相撲取りだけだったと言う。反面、地主階級は家と権力を守り自分の子供には上級学校に進学させ出世の道を選んだ。

礼米とは小作人が地主に対して一年分に当る小作米を四〜五年に一度、礼米として納めたと言うが高い年貢米を納める外に前作米、礼米を納めなければならぬから正しく矛盾、残酷その物である。このような条件でも一言も不平を言わない。

大作人は地主と小作人のいざこざの問題に「タッチ」したが土地の借し借りのブローカでもある。地主に黙認、無断で小作料を値上げし、中間搾取をして自分の役得にした。この事に小作人が不満を漏すと水田の返還を平気で迫ると言う。

小作人は其の年に依って不作の時は大作人に稲作の評価を願うが、小作人は大作人に稲作の減免を願い、借金して町から高価な肴や酒を買い大作人の気嫌を取るが、大作人は朝から一日中ご馳走になり、又、習日も次の日もやってくる。其の度に小作人は肴、酒をご馳走して大作人のご気嫌を取りお土産持たせてやると言うが大作人は今度、別の小作人の家に行き同じ事を繰り返す。正直物の小作人は借金して迄もあれ程のご馳走をしてご気嫌を取ったのだから、年貢米は半分以下と思え込んでいと当てが外れる。

小作人は年貢米の値下げを言うと大作人は「何時、そんな約束を言うた」と冷酷な目と口出して睨み怒鳴り付ける。其して大作人は不当なやり方で小作人に田地を貸し付け、又、新しい小作人から賄賂を搾り取ったと言うが生血を吸う鬼畜であったと言うが古老は往時を今、反省してると言う。

気象異変で、水田は風水害、旱魃と岩木川下流地域は原始的用排水で降雨の度ごとに逆水が有り、其の度に堤防は決壊、水田の冠水は一週間も続き其の内、季節外水の偏東風（北東風）が続きあと数日で稲刈と言

私も十八歳の時、軍隊に志願兵として入隊したが地主階級の息子は上級学校を出て居るから直ぐ将校となり、小作人の息子達は一兵卒で成績が良くても下士官止まりであった。地主階級は総て優位で有り、小作人を貧困と無知に追いやり伸びる芽も（才能）摘み取られ数百年と言う長い長い間、教育と文化を奪った。八八才になる古老が語るには地主階級の権力には村長でも警察でも校長でも平身底頭で若しも一口でも拒むと春の人事異動期には、とんでも無い僻地（へんびな土地）に異動させられたと言う。

地主階級の不合理は僅少でも改革する事も無く、小作人は何時も受身で有り長い間の搾取と重圧に耐え、人間以外の動植物が空気を意識しない様に長い長い間の宿命となつて重圧を常と思ひ、植物人間の様に無力で従順になり百姓だから仕方ないと諦め食われ無くなると息子や娘を売り、又、息子や娘も貧乏だから仕方ないと諦めた、大地主は奉公人や女中を数名も使用、ぜいたくさんまい豪華な生活に明け暮れ、外出の時は「マント」の外套に中折帽子と「ステッキ」そして人力車で出かけるのが普通であったが大地主や大作人の血も涙も無い冷酷無残、貧農や小作人を虫けら同様に思っていた。

又、小作人を苦しめた寄生虫がいた。

「大作人である」大地主の代理人で地主と小作人の連絡役で、小作人に田畑の借し借りや年貢米の上げ下げは地主が大作人に任せていると言う。

古老は一服しながら、又、往時を回顧しながら語り始めた。

長い間の習慣に前作米、礼米と言うのがあったという。前作米は小作人が新らしく水田を借りて小作する時は契約と同時に一年分の小作料を前納し、秋の収穫時には新たに小作米を納めた。又、

うのに水田の稲は見るも無残な姿で稲は赤くなる程に脱粒し、霰や雪が降り「ツマゴ」を履いて稲刈をした年が数回も有ったと言う。

嘉瀬地区は降雨の度に冠水常習地帯で自然の暴威には全つたく無防備で、政治家や地主階級は自然の暴威には関心が無かったと言う。

この様な對建制度に無能な貧農の小作人は数百年と長い長い間の抑圧と自由を奪われ、牛馬の如く過酷な重労働に耐えて来た往時の大作人だった古老は一日がかりで語ってくれた。

闇コメは流れる

取締りが厳しくなればなるほど闇がふえる。このうち特に米の闇が多い……。悲しくそして矛盾の世相を移して……。

（当時のヤミの仕入れ米は約六百円から八百円で、青森大鰯方面に届けて、一俵約千二、三百円程度で買い込んでいる傾向である）

闇米の手法として

サルケ（泥炭）の中に米をかくす方法が流行っている。新田地帯は薪が不足なためサルケを薪代用にたいしているが、これを利用してサルケを荷車に積む前に闇米六俵ほどを下の方に積む、その上に泥炭を積み重ねる、これらの荷馬車で運ばれる米は多く七里長浜の海岸取引だ、全くヤミ（泥炭）米サ。

（S 21、12、19 陸奥新報）

幽霊の思想を歴史的にさかのぼれば、原始社会は海の精、山の精は信仰の対象となっていた。平安時代は怨霊―生霊。源氏物語・菅原道真―平将間―室町時代亡霊―平家一門耳無し芳一。一能の主役にしばしばこの亡霊が使われています。江戸時代―幽霊―四谷怪談―個人の恨みが多くなる。

現代の幽霊―資本主義の時代に現れるのは建設工事―交通事故―戦争で死んだ兵隊の幽霊が代表的なものであろう。これは、ある個人に恨みを持ってそれにたゝるといふよりも、現世に思いを残した、さまよいる霊であります。||梅原猛著『幽霊』の一部分要約||

第一話『タソガレ』

『タソガレ時』夕方になって、やがてトツプリと日が暮れるちようど前、昼の残光が一時強くなったような感じで、あたりがパット目の醒るように見える刻限がある。

ほんのわずかの間であるが、この時間がすぎると、もうあととんどん夕闇が濃くなっていく、そしてほんとの夜になってしまいう間に、何にも彼もが、どうしてもはつきりと見定められない時刻がある。此の時刻が逢魔刻、タソガレ時である。

奴橋より北におゝむね百メートル地点、現在嘉瀬館跡の標木の所から北側は、私達子供頃は、『切り割り』と称する地名で呼ばれています。東西の道端（道の両側）は一五メートル程の高い急斜面の坂になり、子供等には危険で登れそうにありませんでした。

畑中の鳴海惣右衛門さんと妻の二人が、金木方面より荷馬車に乗って、タソガレ時、二人は切り通し『切り割り』の道を通り抜けようとする、前方に黒い影がパット横切った。

馬は鼻をフーフーと鳴らしながら立つ止って動きません。惣右衛門さ

八幡様と白狐

山中 長三郎



んは驚いて言う

『困ってしまったよ』比れから先さ行がなくなってしまった。その八幡様の木コ持って来て、比コさ柵コ造ってしまったね。

しかし妻には柵コも何にも見えません。変に思った妻は、早く馬コは追って見ようと大声で呼んだ。すると惣右衛門は手綱を取って馬の尻を思切り叩きだしたそうです。

馬はな鼻をフーフーと鳴しながらも歩き出して、無事我が家に着かれたそうです。それにしても不思議、酒も飲まないのに狐に化されたのかとその後日にもしばしば二人語り合ったそうです。

右の話コは戦前の事でありませぬ。

第二話 『アカツキ』

『アカツキ』真暗な夜の闇がだんだんと薄れて、気が付かぬほどずつ白みかけてくる時分、まだすっかり夜が明けきらぬ頃を昔の人はこんなかしか明暗の差にも繊細な探さの観察の目を持っていた。

田舎の人々たちはこんな時分から朝の仕事を始めていたためであるか、たといは『アカツキヤミ』などといったのであろう。その一時の晩闇がすぎれば、すなわち夜がすっかり明けきって朝になるのである。

ちようどその時分が、向こうから来る人の容貌がはっきりと見定められない。彼は誰だろうと見覚えはあるが、誰だか解からないといった明暗の時刻である。それが『カワタレ時』『アカツキ時』である。

冷水の大工職人神島弥之助さんが私の家を建築した時、語ってくれ

たお話しであります。

金木町の某宅の仕事を終り、建主に酒コ飲まされて帰り道、第一話の切り通しの場所に差し掛かると、急に体が重くなり家に着いた時は、もう疲れ果てて土間に倒れてしまったそうです。

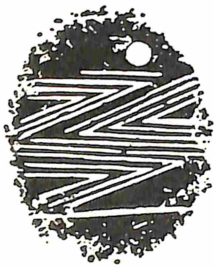
その容体を見た妻は『どうしたば』『どうしたば』と声を掛けたけれど只ウンウンと言うだけで、身動きもしなかったと言う。

容体は腰まで泥まみれとなって、朝持ち出した弁当箱と荷物は、何に一つ持って居無かったそうです。

時刻はもう夜明けであり、妻は早速切り通し周辺に行き、荷物を探したが、只見たものは、苗代の泥の中には乱れた足跡が点々とあるだけで、弁当箱も荷物も何に一つ見当たらなかったと言う。

帰り道、なんとなしに、ふっと八幡宮の方角を見た時、八幡様の森に、白い物体が点スーと入って行かれたそうです。当時八幡宮境内に、老い白狐の主が住みつき、切り通しに出没して、人々を化したという噂さが流れていました。

右のお話しは、戦後まもなくの事であるので、現在の外燈の輝きの多い今日では、右の体験は、なかなか難しがたいと思います。



ふるさと人名録

木立 民五郎

明治維新前の嘉瀬にどんな人物が生き、何を為したが、今その記録も無く、語り伝えられた史跡もない。ただ墓石に残る文化、文政の文字は、何々代々の墓と刻まれた苔むした無情の姿だけである。

百年の歳月はふるさと人の脳裏から泡の如く消え去って今日語る人も無い。

かたりべ第十集の機会に、明治、大正、昭和の世に、嘉瀬で生を亭け、この部落を足場に、己が生涯に花を咲かせた幾多の人士について古老の思い出、またその人が残した事績について書き綴って置くことも、「かたりべ」会員の責務と考え、今は亡き人達の名を連ねて見たい。

村の東に標高六十三米、地図には立山、いつの頃か観音山となっ小さな御堂に安置されている、津軽民謡の元祖桃地蔵こと、黒川桃太郎の名はあまりに嘉瀬の名を広く天下に知らしめた人物であることは、嘉瀬人物史の第一人者であると云って過言でないと思っている。

弘前市出身の作家長部日出雄が世に紹介して余りあるので茲に詳しいことは省くことにする。

青森市の劇場物置で一人淋しくこの世を去った時、嘉瀬役場に葬儀費用、十二円七十銭の請求があり、時の村長山中利一が専決で支払ったと

耳にしたが、桃はやはり嘉瀬人で終った人物であった。

アダナからすればカラスまきであり、カラスの系統には唄の名手がたくさん出ている。

カラス長次郎の黒川清竹など、神奈川県熱海温泉で民謡の先生と呼ばれ、いつであったか女優の淡島千景経営の「梅園」ホテルの奥座敷で清竹君の美声に觸れ、流石桃の血が流れていると感じた日もあった。

同じ観音山の御堂に、カドのアンチョこと、山中利一の像は小山内漫遊が師と仰ぎ、敬愛やみがたく刻んだ「山中利一」は明治三十年生まれだから遠い昔の人ではない。

青森師範から早稲田大学に学び、相撲部の主将として鳴らし、船でアメリカ外遊の時、ニューヨーク波止場で黒人ボーターを二人程海に投げ飛ばした武勇伝もある。

帰国して日米拳斗クラブを設立し、発会式には嘉瀬から友人の四・五名を招待し、華々しく開幕した話など父から聞いたことがある。

大正十二年の関東大震災の時、無政府主義者大杉栄の葬儀場に乗り込み、ピストルをかざしてその遺骨を奪った主謀者でもあった。

日本右翼の首領、頭山満の右腕として活躍し早稲田大学同期だった。

八源こと津島文治も山中利一の名をきいただけでもわなわなとふるい大変な恩義にあづかったときいている。

戦前中川村から立候補した秋田喜十郎の県議会の選挙応援で一度嘉瀬小学校の体操場で演説したことを覚えている。

その時話した一節に、山中利一が相撲部の主将時代相手と土俵に對した時は、いつも生まれ故郷の岩木山を静かに眼をつむって伏しおがんだ話など私達少年の胸を熱くしたものである。

私の母と小学校同級だったせいもあって帰郷の時はよく私の家に立寄り、小学校四年の頃だと思ふ掛袖にする大きな為書を揮毫してくれた書が今一寸見当たらないのが残念だ。

昭和十一年頃中柏木から出た杉山金造が嘉瀬村長時代の話だが、恰度山中利一が東京から青森に来て県内右翼の壮士を青森市浜町の料亭に集めて宴を張った。自分の一人である嘉瀬出身の山中瀧夫（日支事変嘉瀬最初の戦死者）が親分の山中利一に嘉瀬村長県庁に陳情に来て駅前坂本旅館に泊まっていることを知らせた。

山中利一は電話で杉山村長に浜町の栄屋に来る様話した。杉山村長は兼々、山中利一の名は知っていたが、逢うのは初めて、それでも勇を鼓して浜町の宴席に馴せ参じた。

座敷に入ると四五十名の壮士がズラリ並んで一斉に村長杉山金造の方に視線が走った。

山中利一は床の間に悠然と座って、みんなに聞こえる様声高らかに、オラ方の村長が来た。

サアサア村長、こっちへ手で招いた。

杉山金造の足がブルブルふるいて、床の間に座っている山中利一の前

まで行くのがやっとのことだった。

後で村長杉山が私にその夜の話をきかせたのを今だに忘れない。

この晩の宴会の勘定をみんなもつのかということも含めて、とにかく肝を冷した一場面であったが結局は御馳走になって車で送られて宿に帰った。

嘉瀬にもこんな人物が生まれていたのかは杉山金造の述懐であった。

戦後三和代議士の参謀で働いた時、山中利一のことを訊ねたら、二目も三目も上の人物で到底私達の太刀打出来る人でないということから推して偉大な人物だったと思う。

妹は青森市柳町に白菊美容院を経営し、アマ相撲の第一人者「日本海」がその夫であるが今は亡い。

終戦直前思想犯で青森署に留置された私に、早刻布団等差入れた女傑でもある。

御子息はRABの山中達一、病に犯されてなかったら大きく日本にその名を残した人物と考えている。

小山内嘉七郎こと「小山内漫遊」は山中利一の輩下として活躍しソ連領樺太から間宮海峡を渡り、シベリア砂金掘りに熱中し、数年の間ロシア沿海州で生活し、山中利一没後は故郷嘉瀬に入り、観光開発に、民謡宣伝に、又小泊権現崎に御堂建設の祈願をかけ、嘉瀬のドブログ事件で対の警鐘を乱打していつ早く税務署役員が酒狩りで部落に入ったことを知らせたり、自ら正義の味方漫遊の意気は八十歳歳の眼を閉じるまで衰えを知ることがなかった。

漫遊の耐寒体操。名付けてアザラン体操も、シベリヤ放浪時代の土産品である。

根據地を嘉瀬観音堂に置き、八甲田酸ヶ湯温泉の鹿内仙人と肝胆相照らし、自らも小山内仙人と称し、単身岩木山赤倉の沢を探検したり北海道の西海岸に浮ぶ、大島、小島の間に沈む夕陽の測定をやったり、自作の歌詞で時代風潮を嘆いた民謡は独特の気概が会った。

小山内漫遊の一生を振り返る時その波瀾万丈の生涯は一遍の小説以上のものがある。

富国強兵の明治の夜明けに、何といっても明治十年の西南の役に参加したオソギの爺っこ鳴海兼八は嘉瀬出身の軍人第1号でありましょう。

降って日清戦争、台湾討議と何でも戦病死の出征はあったが明治三十七年の日露戦争に至って津田男治の功七級鷓鴣勲章が生れ、中柏木の原田薫次郎、捕虜となって敵ロシアのレニングランド、ドイツのハンブルグ港から、日本に帰った小栗崎の棟方万九郎、後年酒瓶を懐にして歩き廻った輻重兵の神島弥太郎、とにかく日露の勇士は元氣者だった。

ここで定かでないが山中秋男の父が功六級の叙勲章であったときいているが、その実績を擱めないのが残念だ。

大正年代に入ってシベリア出兵で、古町の中村正一、吉崎男治、ニコライスク事件でロシアに駐屯した松川専五郎、満州事変、日支事変、大東亜戦と歓呼の声に送られ嘉瀬駅を後に大陸の広野に出征した数百人の若いふるさとの勇士は、「水くかばね 草むしかばね」と祖国尽忠の華と散った歴史の面影はただ一条の夢と語るにはあまりに傷々しい時代の琴線である。

ここで明治、大正、昭和の嘉瀬村長をとり上げて見たい。

初代の今甚吾についてはあまりよく知られてない。郷蔵事件で新聞等に大きく書かれた、工藤保次郎、耕地整理と言われた旧十川河畔の嘉瀬

区有地を開拓し約四十町歩の水田を部落民に与えた功績は大きい。

昭和に入って津軽鉄道の自動車に酔って停車させた武勇伝の人、伊藤亀吉村長、八十歳で村長の椅子に座った鳴海由次郎、村の発展基盤は道路の開発からと、今残る幾多の新道開発と郵便局を設置した山中礼一、マラソンで県下第一人者となった沢田与三郎を育成したのもその頃である。

消防組の勇み肌を培った組頭にはサネム、沢立こと沢田立雄、花田政次郎、原田勇太、と有名人が伝統の嘉瀬消防組を築いた。

今日の消防団と比較して雲泥の差とは過ぎた日の火消し組を知っている者の言葉だろう。

大工の草分として、土岐五郎吉、沢田西之助、山中芳造、内海勘四郎、少し年代が下がって、舛甚与作、土岐武蔵、内海精蔵、土岐繁美までが大工頭領としての本流で多くの建築物が残っている。

馬耕時代は馬の数も多く、役場には馬籍係もあった程で、獣医でなかったがその頃よく馬の腹痛が流行し、それを見事に治療したい小栗崎の松川勘九郎も忘れてならない一人である。

今一人古町の鳴海万次郎はカップから骨つぎの技術を授った骨つぎの名手である。

足駄がけで役場の切符を廻した万吉アシダと呼ばれ三号こと役場の小使冷水町の秋村万吉も有名人の一人である。

古町のサネムは消防組取で知られているが、火事騒ぎでも走ったことがないという慌てないことでは先づ第一人者であった。

同じ町内に中村オリサという座女が住んでいて、美声にかけては、川倉の賽の河原、下北の恐山等の祭りで語イタコのおろしはその美声は誰

一人及ぶものがなかったという。

古町にはまだ有名人が居る。

生涯三味線、尺八、笛と祭りには欠かすことの出来ない伴奏者木村峰五郎の祖父はまたムガシコ語りの大家で、冬の日にはサルケ持参で町内の子供はカゲムシロをくぐって木村峯のジサマのイロロを囲んだものだった。

天理教の今勘吉、大和山の神島安次の外、あんじゅ様こと木村担導の続経の美声は山セミと云われ赤衣の和尚も影が薄かった。

出稼ぎのことにふれると、大正、昭和の初期北樺太の石油会社へ毎年渡航した鍛冶町の津田与八、小樽港の石炭荷役で強力で名を売った花田永助、秋元惣五郎の荷上の力自慢は今日の若い人に想像も出来ない、米七俵位の重を肩にして歩いたというから大変なもの。

嘉瀬には早くから海外雄飛の人もあって新しやのコンチョウ、車町の飯塚末太郎は南米ブラジルに渡ったが一度も日本に帰って来なかった。

又満州開拓に大きな夢を託して農会技師の職を投げて渡満した古町の舛甚与作、東梵珠山系大判山の金鉱開発に晩年の勝負を賭けた原田耕造、鍛冶町ヤクスコ周辺に埋木の資源が眠っていると信じて掘サクに情熱を燃した山中樵夫、脈々と流れている探究心の血は、どこから流れて来たのでしょうか。

小山内漫遊、舛甚作は若い頃シベリアや沿海海岸に砂金探索に出かけたこともある。

将棋も昔から旺んで、床屋の櫛引藤吉郎、野宮金五郎、外崎男茶、ホントのオヤジ山中福次郎、自転車屋の原田要助等輩出したが有段者の人は居なかった。

人にアダナをつけることを得意とした木村秀吉、映画劇場を北郡下各町に有って自ら旗をかついで宣伝に走り回った日乃出屋こと、木下千代吉、乗り合い馬車で名高いピーポーの間山喜代吉、小柄であったが力自慢の三俵かつぎの斉藤直衛、嘉瀬の水不足解消に精魂傾けた須崎梅太郎、木挽の草分内海勘助の俾内海勘之作が手割征の親分となってやはり木工業に入ったのも面白い因縁というべきである。

嘉瀬は俳句もまたさかんで、土岐石人、山中天小人、小山内昭人、小松一声、平井鉄華、等々あるが山中育がまたまた句会に出て時恰も仲秋名月の季節、その時の作品に「さるまたの高さに盆の月がさす」と詩った句など未だ忘れずに口ずさむことが出来る。

嘉瀬では大正、昭和と続いて長い間学校の校長をつとめた鳴海民之助は校長先生と呼ばれ鳴海民之助のことを指していた。

また在郷軍人分会長は山中熊四郎の代名詞で取扱ったことも面白い。今この人名録を書き進めているうちに次第にふるさと嘉瀬の姿が深い霧の中から浮び上がってくるのはとても他の部落で見られない特異な太い線があることである。

酸酔しないドブロクの匂いが、やがて芳醇の世界を待っているように、今も力強く続いているのである。

金木町に合併して三十有年、金木町大字嘉瀬となっているが幾十人かの人名を浮き出しているがそのどれ一人を掘り下げて二十枚三十枚の伝記録が一片の物語となって大きな人名録になることを信じている。

思い出せば懐かしき人々

岩田春海

会うは別れの始め、というけれど、出会いなくて人生の思い出は語れない。

いま思えば、私の手の届かぬ世界に住む人たちとの出会いなど、思い出すままに記してみる。

一、神戸・西宮消費組合勤務の頃

Ⅱ 賀川豊彦先生Ⅱ

昭和九年三月中学校（神戸の滝川中学）を卒業し、陸軍士官学校を受験したが、身体検査で不合格となり、学課試験を受けることが出来なかった。その時には他の学校の入学試験も終わっていたので進学することができず家に居ることになった。だが、ただふらふらしているのも退屈なので、西宮消費組合に手伝いに行くことになった。

西宮消費組合は遊佐敏彦氏（後に明治学院教授）がやって居たのでした。

四月から西宮消費組合の手伝いをして二、三カ月経った頃、消費組合で働く若い人たちを集めての教育が神戸消費組合で行われた。

子供たちや一般の人を相手に一銭、二銭、三銭とわけてやり、さらに、自分でやって食べてもらうなどの事もやりました。

また、土曜日は午後、日曜日には午前から午後にかけて学校を借りて、日本料理店や西洋料理店の調理人をお願いして消費者の御主人や奥さん方に料理を作る勉強をしていただき、子供さんたちは先生と一緒に字を書いたり、共に遊んだりすることをやってもらい、料理が出来たらみんなで一緒に食べながら話し合いをするような事をやりました。

このような集いは、時によっては電気器具の修理（電気屋さん）、家具の修理（大工さん）等、その時によって違う講師に来てもらってやりました。

賀川先生も当時各方面からひどい弾圧を受けたのですが、それに堪えて運動を続けたような次第です。これが当時の消費組合運動でした。

二、京都。北白川在住の頃

Ⅱ 野沢如洋氏Ⅱ

父岩田清三が大正十一年三月に奈良の連隊を最後に軍役を退任し、奈良市高畑町の家から大阪市野江に移り一年ほど過ごした大正十三年四月に京都市の旧制第三高等学校で軍事教練を指導する事になり、京都市北白川に居を移した。

京都の北白川の家には父の幼少の頃の友だちだという人が尋ねてきた。

大正十三年、当時小学校三年であった私は、その人の要請によって北白川を案内して歩いた。

同級生の家が農家が多く、田や畑を馬を使って耕作する所が多かった。

集まったのは神戸消費組合、灘消費組合、西宮消費組合、その外は忘れてしまったが、神戸、大坂方面の組合で働く若い人たちでした。神戸消費組合の長であった賀川豊彦先生が主唱して始めたものでした。先生は、商人の中間搾取排除をモットーに生産者と消費者の直結を唱えていたのです。

西宮消費組合の仕事をあげてみると、当時は自動車もバイクもなかった時代で、自転車の荷台に荷籠をつけ、西宮の浜や浜甲子公園、今津の浜の漁師の家に行き魚を一銭、二銭と買い取り、組合に持って帰り、消費者へ配達するという具合で、会計は組合費として後にもらう場合と、一銭で仕入れたものを二銭、二銭のものを三銭としてやると云うような状況でした。これが商人の手に渡ると十銭、十五銭となるので、生産者と消費者を直結する事が主でした。また、西宮の山の地帯甲子園球場付近、仁川、宝塚あたりの農家で野菜、鶏肉、牛肉を集め、これを消費者へ届けるなど、朝早くから夜遅くまで自転車で走り回るのが日課でした。当時は現在のような冷蔵庫がなく、氷を入れた小さな冷蔵庫しかなかった時代で、生鮮食品は腐るのが早いのでその前になんとかしようとして鉄板と金べらを用意して、魚・肉・野菜をこまかに切り、油で炒め、

その人は、

「馬っこはなあ、ないたり、わらったり、おこったりするハンデ、まてに見ねばまいねんだじゃ」と云って腰をかかめて、姿勢を低くし馬を前から見たり、横から見たり、後から見たりして一時間以上もそんな有様を続けて、二、三軒の家を回るのでした。帰りに家の近くになったら、

「オメ、クかけたな。」と云うのです。

学校の算術で掛け算を習いはじめた頃なので家に帰って母に、「あの人が、いやな人だ。オメ、九かけたなア、と云うけれど、何に九をかけたばよいかしら……。」と言ったら、母は「それはちがうんだ。お前に苦労をかけたなア、というねぎらいの言葉なのだよ。」と言われ、私も納得した。

家に帰ったらその人は、飯台を出し、硯石に墨をすり、紙をひろげて絵を書き始めた。馬や山水を書いたのです。

その人の絵は何十枚もあったのですが、東京の空襲の時に焼いてしまいい、弘前に置いてあったのが現在残っている額にしたのが一枚と軸にしたのが五枚ほどになったしまいました。

これが父の友だちである野沢如洋氏とのすれちがいの出会いでした。

三、神戸・青谷川のほとりで

Ⅱ 上原 謙さんⅡ

昭和十年四月に早稲田の専門部に入り、その年の夏休み（七月）に神戸市仙寺通に行った時の事です。

叔父の家は青谷温泉の近くでした。叔父佐藤平六郎は立教大学に在学

した頃はバスケットの選手で、極東大会に日本の選手として出場したのです。卒業して大坂商船会社に勤めました。

ある日、叔父の家に居たら、叔父の出た立教大学を出たと言う人が尋ねてきました。叔父と同級か後輩かはっきりわからないのですが、池端いけはたと云うのだとの事です。叔父はまだ会社から帰っていないだったので私がその人を案内して、青谷温泉の裏の青谷川のほとりを一緒に歩いたので

す。

その時、その人は「セントポールス、ウイルシャイン セントポールス シャイン、セントポールス、ウイルシャイン。セントポールス。シャイン。ラ・ラ・ラ、!!ラ・ラ!!セントポールス・シャイン!!」と天までとどくような美声をはりあげて摩那山の頂上から六甲山まで響き渡るようにうたったのです。

家に帰ったが、まだ叔父が帰宅してなかったのです、その人と一緒に食事をして、いろいろお話をしました。その時、「また今度来るから、その時会いましょう。」と言って別れたが、その後叔父が召集となり、南方で戦死したのでその機会を持つことが出来ませんでした。

別れる時に「おれの名は、いけはた、の、きよ、だ。おぼえていてくれよ。」と言ったのを思い出す。

後にそれが流行歌手の上原謙氏だと解ったが、再び会う機会がなかった。

加山雄三氏をテレビで見るとたびに青谷川のほとりを歩いて天までとどけと歌ったあの美声の「いけはたのきよ……」さんを思い出す。

これが上原謙さんとのたった一度だけの出会いです。

四、東京・早稲田時代 (1)

井沼清七先輩

昭和十一年の何月であったか忘れたが、午後授業が終わってから早稲田の相撲部の道場で練習を見ていたら、山中利一先輩（嘉瀬村出身・日米拳闘クラブ会長）が来てしばらく練習を指導して居た。そこへ会長を尋ねて若い学生が来た。その人と山中先輩が話して居たが、すこししてから私を呼んだのでそばに行くと、先輩はその人に私のことを「弘前の岩田だ。」と言い、私に「中里村の井沼だよ。」と紹介した。その人は「中里の井沼清七です。」と言いましたので私の同級生の今孝（卓球）の事を話すと、同じ中里の出身だ、と話し山中先輩に何もかも世話になっている、との事でした。

井沼氏は陸上部で短距離の選手でアムステルダムオリンピックへ出場した人です。

ある日の朝、授業のはじまる前に関西出身の植野登君（陸上部ヤリ投げでオリンピックの選手）と正門前を歩いていたら井沼氏に会ったので三人で正門前の稲門堂に入ってコーヒーを飲んで話していたら、ハッ／＼と息をせかして入ってきた学生が、井沼先輩に挨拶をして私の飲みかけのコーヒーを「いただきます。」と言って飲んでしまった。私は「どうしたの？」と聞くと、「毎日学校へくる時、高田馬場駅から走ってくるのだ。」との事で、陸上部の長距離の選手であった中村清でした。中村清と言えばマラソンの瀬古選手を育てた人です。中村氏とはその後何回か会って話をした事があったのを思い出します。

井沼先輩は卒業してから銀座の松坂屋に勤めたので、たしか昭和十二

年であったと思いますが、私と友だちと井沼先輩をたずねた行き、臨時として（今であればアルバイト）松坂屋で働くことになりました。友達井沼先輩より五円前借りたのですが、約束した時に行かないで金を使ってしまったのです。その時私は約束した時間より少し遅れて行ったのですが、井沼先輩からその事を聞いたので、友達のため五円を都合して先輩の所へ持って行き返そうとしたら、井沼先輩は「これはよいから持っていけ、先輩が後輩の面倒を見るのはあたり前だ。」との事でした。

井沼先輩には卒業するまで今孝君と共に大変お世話になりました。これが井沼氏との出会いからのいきさつです。

五、東京・早稲田時代 (2)

井沼捨己氏

昭和十年の四月に早稲田の専門部に入学し、一学期が終り八月夏休みで神戸の家に帰り九月に二学期がはじまるので東京に行く時に父に手紙を頼まれ、父の友人に渡すように預かって来ました。

九月の初めの頃の日曜日の午後牛込富久町の井沼捨己氏の家をたずねました。

井沼氏といえば天皇陛下の侍従長であった人ですので、私のような学生が行ってもどうせ粗末にされると思い、玄関で来意を告げて手紙を置いて帰ろうとしたら、出て来た人が「少しお待ち下さい。」と申されたので待つて居たら玄関へ出てきた人が「少しお待ち下さい。」と申されたので「珍田です。どうぞおあがり下さい。」と申されたので、立ったまま挨拶していたのですが、失礼と思い、たたみの所にあがり手をつけて挨拶し

直したら、

「ただ今御尊父様の御手紙を拝読させていただきました。よろしく御伝言下さいませ。」と申し、手をつけて頭をさげられました。私が「どうもありがとうございます。失礼いたします。」と帰ろうとしたら「今後お機会がございましたら御来駕下さいませ。お待ちして居ります。青森や弘前や金木の事などお話ししましょう。」と申され、何回も手をつけて挨拶されました。

そのあと御伺いしなかったのですが、あれだけ丁寧にされ恐縮してしまつた事を思い出します。

六、青森・歩兵第五連隊の頃

大下常吉先輩

昭和十四年五月に召集になり、青森歩兵大五連隊に入隊し經理の幹部候補生になって少し軍隊生活に馴れ、夕方酒保（兵営内の売店）に行つて物を食べたり酒を飲んだりする事が毎日のようになった。

十月のある日、酒を飲んで居ると、そばのテーブルに戦鬪帽をかぶつたひげをはやした戦地かえりの男が飲んで居た。その人が私を見たに「おい、君は主計の幹部候補生だな!!主計の幹部候補生は大学か専門学校を出なければいけないが、君はこの大学だ!」といわれたので「早稲田の専門部です。」と言うとその人は、「おれも早稲田だ。もっとこつちへ来いよ。」と言うので傍へ行って一緒に飲み話をしました。

「早稲田の野球はどうだ。」と言うので「負けてばかりですよ。」と言うと「早稲田が勝てばよいが、六大学の野球も早稲田ばかり勝つていれ